FADO 21

Janeiro 1999

月田秀子ファド倶楽部

TSUQUIDA HIDECO FADO CLUBE JORNAL

月田秀子の昨日、今日、明日

三都公演を終えて、達成感も、解放感も、疲労感もなく、一体私は何をしたのか？何を伝えようとしたのか？単に、自分の好きな歌を羅列したに過ぎないのではないだろうか？大阪公演の土壇場にステージで不覚にも流した涙が私を責めたてる。ホームページにも、郵便受けにも、答えは見つからない。「アマリア・ロドリゲスや、アライン・オールマンや谷川俊太郎の言葉でなく、月田さんの切実な言葉を、今度は聞かせてほしい」余りにも当たり前の友の言葉が今の私には重い。

新年の冒頭の言葉としてはこれは余りにも暗過ぎる。これはこれは失礼をば致しました。ともかく、すべてを出し尽くしてしまったすっからかんの月田1999年、ゼロからの出発です。今年もよろしくご声援下さいます様お願い致します。

人は出会い、別れ、再会を繰り返してゆく。ファンも同様。感激の中で出会い、しょっちゅうライブに来て下さった人もプツンと姿を見せなくなる。何年かしてひょっこり再会。それぞれの人生があり、思惑があり、悲しみがあり、喜びがある。

そんな中で、私を精神的に支えてくれている人が何人かいる。北新地の「安寿庵」という、今年で27年目を迎えるクラブを経営されている沖弘子さんがその一人だ。新聞に「新地よもやま話」という何とも歯切れのよい文章を、2か月間連載された才女でもある。一昨年のバナナホールのきまぐれコンサート以来、私の身勝手さも、至らなさも、甘え下手さも、すべて包み込み応援してくれている。－15年程前、シャンソンを歌い始めた頃、よくご馳走してくれた初老の方がいた。こんなにご馳走になってどうやってお返ししたらよいのかと言った時、返ってきた言葉を思い出す。「僕に何も返すことなんかない。君が、年いった時、今度は君が若い人に、してあげればいいんだよ」－私も、何年かして、ママの様な、金はないけど夢のある若い人の力になれる様な女性になりたいと思う。自分のことばかりでなく、そんな余力のある人間に。こんな年になってもまだ、一人食うのが精一杯の私だけど。

不況、リストラと厳しい時代、自分にとって一体何が大切なのか、見極める時でもあります。焦らず、慌てず、欲張らず、ゆっくり歩みを進めてゆきたいと思う。何もできなくたっていい、ただ、こうして生きていることから、すべてが始まるのだから。

月田秀子

「無言館」を訪れて
月田秀子

11月、小諸ユースホステルでのライブの前日、長野県上田市の「無言館」を訪れた。大阪から殆ど休憩なしに小諸まで運転してくれたＳ氏に、更に１時間程足を延ばしてもらってのことだ。いつもなら、ギタリストの圭ちゃんこと野上圭三の運転する車に、忠さんこと池側忠と、音響機材運搬車に同乗するのだが、今回は、どうしてもライブの前にそこを訪れたくて、たまたま神戸からおっかけで小諸へ行くというＳ氏の車にまさに便乗させてもらった次第である。

上田市街を見晴らせる小高い丘の上に、その建物は、あらゆる虚飾を拒否する風情で建っていた。街を見下ろすベンチに、一人の女性が物思いに耽る様に座っている以外、人影は全くなかった。ポルトガルの田舎の教会にある様な質素な扉を開けると、意外や、30人程の人達がいるにもかかわらず、静寂が館内を満たしていた。

画家を目指しながら、志なかばで、戦争に駆り出され、帰らぬ人となった人達の絵を、館長でもある窪島誠一郎氏が、全国を歩いて収集したという。遺作となった絵以外に、愛する恋人や家族に宛てた手紙や、写真、使っていたパレットや絵の具などの遺品も展示されていた。「戦争が終わったら、完成させる」という言葉を最後に、未完のまま残された絵。モデルは恋人だった。

十字架の様に４つのブロックに区切られたそこの１ブロックを見て、込み上げる涙は止まらず、体の震えを押さえるので必死だった。愛する人たちを残し、絵筆を、銃に持ち替え、ある者は戦場で、そしてある者は故郷に思いを馳せながら設備も整わない病院のベッドで帰らぬ人となった。

やっとの思いで、出口までたどり着き、窪島氏を訪ねると、出張中だという。彼は、ファンの石倉さんの紹介で一度、大阪のライブを聞きにきてくれたことがあるのだ。髭づらのがっちりした体格の熊の様なひとだった。丁度資金集めと情宣の為来阪された時のことだ。彼の情熱とゆるぎない反戦への思いを、この「無言館」に来て初めて知った。

外へ出ると、晩秋の山々に、薄日が射し、鳥の声がした。ベンチに座り、気を静めようと煙草に火を付けた瞬間、嗚咽が込み上げ、涙が堰を切った様に溢れ、それでもそれを堪えようと体中に力を入れた。慟哭、それは久し振りに私の心を襲った衝撃だった。

忘れてはならない、戦争の惨たらしさを、そして、人の命のかけがえのなさを。絵一枚残せずに死んでいった人のいることも。

私はまた訪れるだろう。私自身の生の意味が希薄になった時、再び、生きることのかけがえのなさを感じる為に。そう思いながら、振り返ると、「無言館」は、まさにもの言わぬ墓標のように、楚々と悲しみを湛えて、丘の上に立っていた。

インターネット・ホームページ掲示板から

今多忙なのにメールを書いています。何が多忙なのかといえば、ゼミで「少年非行手続と被害者の救済」というテーマで国学院大学渋谷キャンパスでシンポジウムを開くことと、友達とやっている同人誌的ミニコミ誌「月刊サンク」というものの編集があるからなのです。

月刊といってももう一年ぶりの発行になるのですが、その中でページ調整の関係でネタが詰まり、月田さんのＣＤと東京公演のことを書くことにしました。何か機会がある毎にファドについては書いているのですが、今すごく困っています。例えば、ファドについて説明する時も、シャンソンやカンツォーネについて知っているとすごく説明しやすいのですが、そうでないと演歌や民謡しかなくなってしまう。民謡というジャンルでいけば共通するかもしれませんが、根底にある精神的な部分があまりにも違いすぎる。何が適切な表現なのか良く分からないのです。月田さんもたまに困っている時もあるようですが、何という表現が一番いいのでしょうか。やはりサウダーデをキーワードに進めていった方がいいのでしょうか。以前書いた時はサウダーデを中心に書いていったのですが、聞いてもらえない限りは音楽である以上、どのような表現を使っても限界があると思うのです。

さてどうしたらいいのだろうか。今大学で書いていますので、色々悩みながら帰ることにします。

林要介

林要介様

私もその答えを出すことは未だできません。しかし、ベルギーの古楽指揮者パウル・ファン・ネーヴェルが16世紀ポルトガルの古楽とこんにちのファドを演奏したアルバム『リスボンの涙』の解説の中にひとつの答があるように思えます。

『リスボンの涙』(SONY SRCR 1866)

月田秀子

ルネサンスの歌と、こんにちのファドとをひとつに溶け合わせるリスボンの“涙”[1]

パウル・ファン・ネーヴェル　濱田滋郎訳

1970年代のこと、私はヤン・ヤーコプ・シュラウアーホッフ Jan Jacob Slauerboff (1898-1936) の詩“寄る辺なき者 O Engeteitado”を読み、初めて〈ファドfado〉という言葉を知った －「昼日なか私は牧場をさすらい／とあるタベファドを聴いた／深夜までその嘆きはつづいた／「人生は果てしないもの悲しさ」と／持ちわびることの辛さが／私の心を締めつけた……」

この詩を読んで一週間もせぬうち、ファドに誘われて私はリスボンへ行き、この“果てしないもの悲しさ”への、私なりの探究に取りかかった。

私が驚いたのは、ファドが150年以上の伝統を持ち、しかも都会の音楽であるにもかかわらず、これについて書かれた記録がひとつも見当らぬことだった。私は探索を始めたが、事実、見聞録も歌詞集もなく、とりわけ、楽譜が１点たりとも見つからなかった。やがてわかったのは、この現に生きている、もっぱら口伝により伝えられてきた都会の音楽を知るには、リスボンという街そのものの核心に触れるしかないことだった。リスボンでファドが歌われている４つの地域から、私は探究の途についた －アルファーマ Alfama、バイロ・アルト Bairro Alto、アルカンタラ Alcântara、モーラリア Mouraria。団体旅行者たちがファドと称するものを聞かされる、喧噪な商売のためのキャバレーやナイトクラブは、店の規模や雰囲気からして、ファドという詩的で内輪な芸術にとってむしろ侮辱でしかないことを私は知った。だんだんと私にわかってきたのは、ファドの本当の住み家は、ツーリストたちの波からは置き去りにされた場末のバーやカフェで、そこでこそ本物の“ファディスタ(ファド歌い)”たちが歌っていることだった。リスボンのファドのアフィシオナード(愛好家)たち －あらゆる職業の男女たち、学生たち、詩人たち、仲間の歌い手たち、ギター奏者たち －がそこに集まって、食べ、飲み、語り合うのである。旅行シーズンたけなわの頃にはツーリストたちが時折まぎれこんでくることもあるが、深夜には彼らはまた居なくなる。その時になってようやく、ファドはその酔わせるような魅力を発揮し始めるのだ。

私個人の体験では、ファドの伝統、昔ながらの格式と心が変りなく守られている場所は、ほぼ４つのバーしかない －バイロ・アルトに２軒、アルファーマとアルカンタラに１軒ずつ。女性、男性１人ずつのファディスタ、ベアトリス・ダ・コンセイサンとアントニオ・ローシャを私が識ったのも、これらのバーの１軒においてであった。この２人は、たんにファド歌手というよりもファドそのものである。彼らが毎晩どの店で歌っているかを私は記さない。なぜなら、そのささやかなファドのオアシスが、バーミュダ・ショーツをはいたツーリストたちに踏みにじられてほしくないからだ。

彼らが歌っているバーは約20×30フィート(6×9メートル)の広さしかなく、食事用の小テーブルが８つ置いてあるにすぎない。常連の客たちは決まって棚に各自のウィスキー・ボトルをリザーブしている。雰囲気は静かで、何物かへの尊重、敬意の空気がただよう。壁には、たとえばアルフレード・マルセネイロ(1982没)、エルミニア・シルヴァ(1993没)のような、偉大なファディスタたちの写真が掲げられている。歌い手が位置するアーチ型のくぼみには、とあるファディスタとその伴奏者を描いた等身大の絵が懸かっている。19世紀のうちにセラミック・タイルで作られたその絵は、1873年にラファエル・ボルダーロ・ピニュイロが制作した版画にもとづいている。

年月の流れをよそに、ファドが演じられる建物の中では、同じ“儀式”が繰り返される －レストランの照明が落とされるや否や、あらゆる会話は静まり、ナイフ、フォークはわきへ寄せられ、全員が魅せられたように聴き入る。ファド歌手たちは、いつもそうした静かな雰囲気のうちで歌い始める。それは、大きなナイトクラブやキャバレーを満たす雰囲気からは、はるかに隔ったものだ。

店主は、表ての入口にもカーテンを掛けてしまう。こうして内にいる人びとは外界と断ち切られ、そこに生まれるのは、サウダーデ saudade にかかわる情感である。サウダーデ、それは私たちが今なお恋愛において知り得るような、望みが望みを追うかのような情感のことだ[訳者注－「ポルトガル語で最も美しい単語」とも呼ばれるこの言葉、saudade は、しばしば“郷愁”とも訳されるがそれだけでは足りない。それは、失われたもの、手の届かないものに寄せる、身を切られるように悲しく、切なく、しかも一種の甘美な陶酔感 －ただしマゾヒズムとは次元が違う－ を伴った情感なのである。ファドの歌詞にもこの言葉はよく現れるので、対訳を参照されたい。]。

ファディスタたちは、ほのあかりの灯された陰の小部屋でテーブルを前にすわり、夢みたり、タバコをふかしたり、飲んだりしていたのだが、今、中の一人 －男か、女か－ が、主な部屋へ入ってくる。彼あるいは彼女は、すでにすわって待ち受ける２人の伴奏者に、曲名とキー(調性)を短く告げる。弾き出される最初の１音から、伴奏者２人とファディスタのあいだに以心伝心の魔力が生ずる。

各ファディスタは３曲をつづけて歌う(ただし、夜も更けるにつれその場の熱気が嵩じてくると、歌い手の中には、それだけではとても止まらずに引き延ばす者もある)。しめくくりの和音が鳴ったか鳴らぬうちに、聴きてたちは拍手を始める。３曲目の拍手が終ると、入り口のカーテンは再び開かれ、照明が明るくなる。魔法は解け、儀式は終る。

20年のあいだファドを聴いてきて、私には一瞬たりとも、そこに申しぶんのない真摯さと、完全な責任感が欠けた場面を思い出すことができない。ファド歌手たちは、歌うとき、つねに自分自身に忠実なのだ。リスボンの街に遍在する涙は、このように価値あるやりかたで世に伝えられる －そこにこもる限りない寂寥感を、ファディスタたちは彼ら、披女らの風情に富むしなやかな歌いくちに乗せ、いくらかでも堪えやすいものにするのだ。

ficção

読切連載
秀子のエピソード帖[その15]
内間 天馬

秀子と酒 その1

私への判決は有罪(ギルティ)と出た。そしてグラスの液体をすぐさま呑めと云う。いやだ、私はまだ死にたくはない！ 陪審員は男ひとり、女ひとり。私がグラスに口をつけるのをニコニコと見つめている。残酷だ。この場から逃れるすべはない。私は覚悟を決め、震える手でグラスを持ち上げた……。ウマい、とてもウマ～い！ こ、これ、なんでっか?「ラフロイグのカスク…」、もっと頂戴！まだ生きている自分を確認し、手は次のグラスへ。ヒャーッ、たまらんよこの味、「それはグレンモランジー18年」、もういつ死んでもええぞ、どんどんくれー!「ラガブリン16年、それから...」

その夜、ある会の流れで秀子女史に案内され、たどり着いたのが、ミナミOSプラザ西隣のシングルモルトバー「ギルティ」。陪審員、いや、マスターの小林龍一氏は、麦芽のみで蒸留されたモルトウィスキーに魅了されこの店を開いたと言う。ご存じのように市場に出ているウィスキーの大半はグレーン(穀類)ウィスキーを混ぜたブレンドウィスキーだけど、この店はすべてモルトウィスキー、しかもモルトどうしさえ混ぜない本物の生一本であるシングルモルトのみ。しかもその安さ。この値段でこの店よくもってるねえ。「はい、きょう閉めよか、あした閉めよかと、ハハハ...」笑ってはいるが、顔は引きつっている小林氏。

ウィスキーを飲んでいる秀子女史を見るのはその夜が初めてでした。ある会合で阿倍野の老舗「明治屋」に呼ばれたのですが、その後美章園の「文(ふみ)」、平野の「BBX」へと移動し、最後に「ギルティ」となった訳です。皆タフだねえ。これらのお店、どれも安くて素晴らしい。有名な「明治屋」は居酒屋の一つのお手本だし、「文」の佇まいは雰囲気抜群、すごく高そうな外観に反し、メニューを見て驚くのはその値段。バー「BBX」のいか卵焼きの旨さには泣けた。ところで皆さん、実はこの夜、私はひそかに秀子女史の酒量を記録していたのです。彼女に内緒で発表いたしましょう。秀子さんごめんやで。まず「明治屋」、私が合流してからの記録ですが、ビール2本、日本酒3合、地酒5合、「文」にて生ビール2杯、日本酒徳利大2本、焼酎(750ml)ボトル2/3を軽く空け、チリワイン(フルボトル)4/5、「BBX」では生ビール(ピルスナーグラス)3杯、ジントニック5杯、そして最後の「ギルティ」でビール2杯にモルトウィスキー3杯。以上、彼女一人の酒量ですぞ。どうです皆さん、すごいでしょう。私、今まで秀子女史が酔っぱらって乱れたのを見たことがありません。従いまして、こっそり彼女を酔わせて……なんていう不埒な計画は、ま、不可能ですな。さて結論。月田秀子の正体……いやあ、いるんですなあ、人間の形をしたウワバミが。しかも、ファド歌手を装っちゃって…。

ところで俺、「ギルティ」で御勘定払ったかなあ?
(払っておきましたわよ、天馬さん)
「ギルティ」050-382-8131

vamos cantar !

老女に寄せるバラード

訳詩 :Caldo Verde

庭の腰かけに　老女がひとり
日傘を手にして　ぽつねんと
それが彼女の生きている舞台
庭の腰かけに　老女がひとり
この世に　これほど悲しい光景はない
けれど　なぜか心がなごむ
あわれとも　みじめとも　思わない
その面差しに　かすかなすがすがしさがあるから

庭の腰かけに　老女がひとり
もうひとりぼっちのままじゃない
いいなずけのお陽さまと一緒だもの
すり切れた黒い日傘を広げれば
陽ざしが破れ穴から慕い寄る
もしその女が　私の母さんだったら
大好きな母さんだったら
この世に　これほど美しい女はいない

庭の腰かけに　老女がひとり
砂利の上に　何やら描いて
結局のところ　私と同じよう
その女の痛みは　まさに私のもの
ああ　私の心はどんなになだめられていることか
老女の腰かけのまわりには
キンセンカが咲き　ツバメが飛び交い
母さんは決して亡くなっていないと
私に告げている

BALADA PARA UMA VELHINHA

Música:Martinho de Assunção
Letra:Ary dos Santos

Num banco de jardim, uma velhinha
está tão só com a sombrinha
Que é o seu pano de fundo
Num banco de jardim, uma velhinha
está sozinha
não há coisa mais triste neste mundo
E apenas faz ternura
não faz pena, não faz dó
Pois tem no rosto um resto de frescura

Num banco de jardim, uma velhinha
nunca mais estará sozinha
o futuro está com ela
E abrindo ao sol o negro
da sombrinha puidinha
O sol vem namorá-la da janela
Se essa velhinha fosse a mãe que eu quero
a mãe que eu tinha
Não havia no mundo outra mais bela

Num banco de jardim, uma velhinha
faz desenhos nas pedrinhas
que afinal são como eu
Sabe que as dores que tem
também são minhas, são moinhas
do filho a desbravar que Deus lhe deu
E em volta do seu banco
os malmequeres e as andorinhas
provam que a minha mãe
nunca morreu

cartas

■二年前に月田秀子さんのファドコンサートに初めて参加しました時、その女性離れした巾のある深いお声にまず驚き、そしてそのお声を駆使して歌われる素晴らしい歌唱力に素直に感動しましたことを覚えております。けれど今回は、コンサートの途中に「このようにファドを熱く表現される月田さんて、どのような人生を歩んでこられたのかしら・・・」と感じている自分に気がつきました。何に喜こび、何に悲しみ、何に怒りを感じてこられたのかしら、とふと知ってみたいなと思いました。月田さんの人生に織り成す喜び、悲しみが内なる思いをますますふくらませて、どうしても歌わずにはおれない・・・。そのことがコンサートを情感豊かな、それでいてある種の力強さを感じさせているのではないかしら・・・と勝手に想像して、二重の楽しみを味わわせていただきました。最後にしっとりと見せた涙は、感謝の涙と共にこれからもずっと皆さんと一緒にファドを愛し続けてゆきたいというメッセージだったのでしょう！と、心の中で大きな拍手を送りました。

（奈良／原野洋子）

informação

●三都公演、ご声援ありがとうございました。東京は、情宣がうまくゆかず、入場者数が、収容人数の半分にも届きませんでした。ただ一つの救いは、名古屋の主催者白象の水谷さんのご紹介で、毎日新聞の酒井氏が、同紙上全国版に三都公演の記事を載せてくれたこと。氏曰く「あなたの歌を聴く前に、あなたのファンになりました。これから東京で歌う所を一緒に探してゆきましょう。」なんと心強く思ったことでしょう。

＜三都公演入場者数＞ 大阪 747名（席数 1425席） 東京 290名（席数 700席） 名古屋 240名（席数 284席）

●２月５日から２週間ほど、ポルトガルへいってこようと思ってます。アライン・オールマンの墓参りができたらと思ってます。２年ぶりの訪ポです。

＜月田秀子のスケジュール＞

1月 6日（日）	大阪・西中島南方「三裕の館」 開演 8:00	*問合せ TEL 06-6304-1745
17日（日）	広島「チャテオ あくさん」	
25日（月）	大阪・心斎橋 「アートクラブ」 (1) 8:00～3回ステージ （入れ替えなし）	*問合せ TEL 06-6253-0827
28日（木）	京都・四条河原町 シャンソニエ「巴里野郎」 (1) 8:00 (2) 9:00 (3) 10:00 （入れ替えなし）	*問合せ TEL 075-361-3535
30日（土）	伊豆「ラフォーレ修善寺 教会堂」	*問合せ TEL 0558-72-3311（要予約）
2月 2日（火）	飛騨高山「高山市民文化会館」	*問合せ TEL 0577-37-1387（宇野）
3日（水）	大阪・西中島南方「三裕の館」	*問合せ TEL 06-6304-1745
22日（月）	大阪・心斎橋 「アートクラブ」	*問合せ TEL 06-6253-0827
25日（木）	京都・四条河原町 シャンソニエ「巴里野郎」	*問合せ TEL 075-361-3535
3月 3日（水）	大阪・西中島南方「三裕の館」	*問合せ TEL 06-6304-1745
25日（木）	京都・四条河原町 シャンソニエ「巴里野郎」	*問合せ TEL 075-361-3535
29日（月）	大阪・心斎橋 「アートクラブ」	*問合せ TEL 06-6253-0827

〈編集後記〉

島田の鈴木さんから、会報のバックナンバーで紛失分を送ってほしいとのファックス。 時々読み返したりして大事に保管してくれているという。意見や要望ではなく、実際に編集を手伝ってくれる人を求む！ 投稿も欲しい！ お××も！（月田）

月田さんはやっぱり「お酒」でしょう（笑）

月田秀子ファド倶楽部 ホームページ
http://www.osk.3web.ne.jp/~fh/index.htm

■月田秀子ファド倶楽部ジャーナル 第21号
■1999年 1月 1日発行（季刊：年４回発行）
■編集・発行 「月田秀子ファド倶楽部」事務局
■〒543-0023 大阪市天王寺区味原町 2-10 エヌケイビル 502号
■TEL&FAX 06-6765-4808